



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.49 (2014.7.30)



広島市立大学開学 20 周年記念 3号連続特集

《第1弾》

みんなの語学センター 先輩たちはどう使っていた？

目次：開学 20 周年記念《第1弾》

みんなの語学センター 先輩たちはどう使っていた？	1
池上真人さん、花井利彦さん、西本淳一郎さん、山本恭平さん、陳俊傑さん、メデイス石井さん	
天の詩から地の小説へ 跨ぎゆく誠実	
名誉教授・芸術資料館もと館長 大井健地先生	7
退任教員メッセージ *退任前所属学部掲載	8
国際学部 ルデイムナ、クリスチャン先生、岩田一成先生	
新着任教員メッセージ	8
国際学部 大場静枝先生、カソン、ルク先生	
「広島でアフリカの〈老いの力〉を見る」	10.
国際学部 田川玄先生	
退任・新任スタッフメッセージ 他	10.

今年度、広島市立大学は開学 20 周年を迎え、それと同時に開学当初から設置されている語学センターも、開設 20 周年を迎えました。

語学センターでは開学 20 周年事業として、今回から 3 回に分けて、ニューズレターで特集を組みます。まず第 1 弾では、過去をテーマに、かつて語学センター自習室や教材をよく利用していた卒業生 6 名からコメントを寄せていただきました。第 2 弾では、現在をテーマに、夏休み期間中に実施される語学センター第一期機器更新で完成した最新の教室の紹介を兼ね、施設としての語学センターの特集を予定しています。第 3 弾では、未来をテーマに、語学センターとの関わりが深い先生方を中心に、語学センターや外国語教育についての展望を含むコメントをいただければと思っています。



1994 年度開学当時の 403 教室（現 403A・403B 教室）。まだ、Windows95 登場以前の時代、操作性に優れた Macintosh を導入。音声や映像はアナログだったものの、現在と機能的には遜色のない、最新鋭の設備だった。

語学センターの特徴的な施設である自習室は、開学の翌年、1995 年に完成し、4 月から学生に開放されました。今号では、過去に語学センターニューズレターに掲載されたことのある卒業生の皆さんの中から 6 名に、語学センターの思い出や、学生時代に培った語学力がどう生かされてきたか、卒業後に外国や外国語とどのように関わっているか、そして、在学生のみなさんへのメッセージを自由に書いていただきました。在学中から自発的に学習・行動をし、自分の道を果敢に進み続けてきた先輩たちの経験談とメッセージは、とても良い刺激になることと思います。



（今回寄せていただいた原稿中の「市大」「市大生」の表記は、広島市立大学開学以来これまでずっと、学生の皆さんの間で親しまれている愛称として、そのまま掲載しています。）

（左）1998 年当時の自習室。ブースは 30 台。（現在、80 台。）インターネット接続は 3 台のみ。
（右）各ブースに Macintosh パソコン、プリンタ、LL 装置（カセット再生）、ビデオデッキ（字幕表示装置付）を装備。電子辞書 CD-ROM も使用できた。

コミュニケーション技法論、
教科教育法（英語）B 担当



（後列、右から 2 番目）松山大学の卒業式でゼミ生と

ています。その居心地の良さは当時から変わっていないように思います。

私が学部生だったころは、語学センターの自習室は雰囲気的に「国際の部屋」みたいな感じで、国際の学生は空きコマに語学センターにいたことが多く、自習室に来れば必ず誰かに会う事ができました。自習室では勉強ばかりしていた訳では全くないですが、そこはやっぱり「自習室」なので結構外国語の勉強している友人も多く、私も刺激を受けてリスニングをやったり、海外の新聞を読んだりしていた記憶があります。

今、別の大学で教鞭を取りながら思うのは、市大生の時は恵まれていたなということです。先生との距離が近く、充実した設備の語学センターがあり、色々お手助けをしてくれるスタッフの方たちもいて、ほんとに居心地良かったなあと思います。

国際学部では色々なことが学べる代わりに、何を専門にしているのかが明確ではないところがあります。そのため、将来の目標を定めにくいかもしれませんが、私も学部生の頃から今の職業を目標にしていた訳ではありません。しかし、学部生の頃に目の前にあった成長のチャンスにちょっとずつでも手を伸ばしてきた結果が、今の自分なのだと思っています。語学センターにはその「チャンス」が満ちています。それに手に伸ばすかどうかは皆さん次第です。何につながるのか今は分からなくても、積極的に色々なことに挑戦し、自分の可能性を広げていってください。

アラビア語圏で日本語を教える！ 第二外国語学習にのめり込むと 見えてくる多様さ

西本淳一郎（国際学部 17 期生 2014 年卒業）
広島大学 教育学研究科
言語文化教育学専攻 日本語教育学専修
博士前期課程 1 年

現在、広島大学大学院にて日本語教育を専攻していますが、学部時代に学んだアラビア語が頭から離れることはありません。アラビア語圏で日本語を教えることを目指して大学院で学んでいるので毎日現地の情勢をアラビア語でチェックしますし、広島にいるアラブ人とのつながりもあるのでこの言語との関わりは切っても切れないものになっています。また大学院での研究では英語の論文にお世話になることも多いので、外国語がいつも隣にいるような状態です。

アラブ・イスラーム学院（東京）
「第 10 回アラビア語オリンピック」
スピーチ部門第 1 位獲得

卒業後、アメリカの大学院へ NHK で語学が大きな武器に サッカー W 杯や選手など取材

花井利彦（国際学部 2 期生 1999 年卒業）
NHK 広島放送局 報道番組 ディレクター

Q. 語学センターの思い出は？

しょっちゅう入り浸ってました（笑）。真面目にリスニングを特訓するとかは結構みんながやっていて、自分も負けじと CNN を聞きながら、シャドーウィングの練習とかしていました。国際学部に入ったんだから、英語ぐらいたもにできないとかこ悪いというものもあったかもしれませんが、また、大学 3 年の夏頃に大学院留学することに決めたので、それからは必死で勉強しました。なかなか TOEFL の点数が伸びず、かなり焦りましたが・・・とは言っても、勉強ばかりでなく、洋画を見たり、海外の雑誌を読んだりして教養を深めることができた語学センターは、大切な憩いの場でもありました。

Q. 今の仕事に英語はどう役立っていますか？

アメリカの大学院でジャーナリズムを専攻した後、NHK に入って最初に赴任したのが沖縄。ここは米軍基地があるせいか、留学経験者が多いのですが、結局勤務した 5 年間のうち、仕事で使ったのは数回程度。ところが、東京の本局に上がったからは、英語力は何かと重宝されました。オバマが初当選した 2008 年の大統領選挙の時は、4 ヶ月間、アメリカ各地で取材。また、カンボジアから同国史上初めてのハイビジョン中継を出しました。さらに、スポーツ番組部の一員として、サッカー W 杯の取材で南アフリカに行ったり、日本代表の長友佑都選手のイタリア挑戦の日々や、バルセロナ FC のリオナル・メッシ選手に密着取材したりしました。競争が激しい局内で、語学ができるというのは大きな武器になっています。

Q. 後輩たちにメッセージを！

語学センターや優秀かつ情熱的な先生とスタッフ陣という「市大の資源」をどんどん活用して下さい。一度しかない学生生活、充実した者勝ちです。ただし、単に英語力をつければ良いというものではなく、とにかく現場に行って英語を使うことで、自分の幅を広げることをお勧めします。最後に、語学センターには、私が NHK で制作した数々の番組（英語版も）を置いて頂いていますので、是非見て下さいね。メディア業界に興味がある学生がいまいたら、いつでも相談にのりますよ。

そんな今に繋がっているのは学部時代の語学センター利用です。語学センターでは NHK ラジオアラビア語講座のテキストを借りては載っている単語をカードに書き写したり、TOEIC マガジンや日本語教育ジャーナルを資格勉強のおともにしていました。スタッフのみなさんがいつも優しく対応してくださったので、それも学習継続の要因になっていたのではないかと振り返っています。

日本語以外のことばを学んでその話者とやり取りをすると、各言語独自のコミュニケーションスタイルや文化が見えてきます。こういったものは、その言語以外でのやり取りでは感じられないので、日本語や英語だけのコミュニケーションでは言語や文化の多様さに気付くにくくなります。だからこそ市大生のみなさんには第二外国語学習にのめり込んでほしいと思っています。第二外国語にあるもの以外をやるのもクールだと思います（インターネット上には学習材料がいくらでも転がっています）。ほかの人がやらないことをやっておくと、あとでいいことがあるかもしれません。

「戦場の軍法会議」
(2013 年、NHK 出版)、執筆



（左）バルセロナで、サッカーのリオネル・メッシ選手と



東広島市内で日本語を教えている風景



NY、ハワイ、そしてベルギーへ 徐々に世界を広げて 美術家として外国で実績をあげた

山本恭平（芸術学部9期生
2011年 芸術学研究科 博士前期課程修了）
安田女子大学非常勤講師・
広島県立広島高等学校非常勤講師・創作活動

外国の美術大学に行きたいと、高校卒業後本気で受験準備したほど、海外留学が夢でした。でも資金はないし、語学力が全然足りませんでした。仕方なく留学は保留、2年遅れて入学した市立大学では壁ばかりでした。初めてのTOEICは400点に届かず、2回目はさらに悪い結果でした。

そんな僕でも諦めず語学に励み、2年次に広島市助成金でニューヨークへ語学留学、3年次に学術協定のあるハワイへ交換留学、大学院在籍中にベルギー政府奨学金によりアントワープでマスターの学位を取得でき、昨年文化庁の海外研修でベルギーより帰国しました。大学を離れる頃には約10年が経過していましたが、TOEICは9割に達し、英語での読み書きプレゼンにも慣れ、美術家として外国で実績をあげられるまでに成長できていました。

この歩みには、ほぼ毎日利用した語学センターの役割が計り知れません。入学当初から英語集中プログラムの受講や、CD付きNHK



(写真上) 学生時代 (写真下) ドイツ、マイセンにて



アメリカ、ロサンゼルスにて

中国から日本、そしてアメリカへ 日々の積み重ねが大きな成果に 国際的な人材は益々求められる

陳俊傑（国際学部2期生 1999年卒業）
Toyota Tsusho America, Inc.
アメリカ在住

Q. 語学センターの思い出は？

大学の時、ほとんど毎日、図書館や語学センターで自習していました。先生やスタッフの皆さんはとても優しく、留学生の私は語学センターが大好きでした。今でも先生やスタッフの皆様感謝しています。

私は第2期生ですが、在学当時、こんな充実した施設を有する大学は数多くありませんでした。我々市立大学の学生は、本当に恵まれていたと思います。語学センターは快適で且つ静かなので、自分の勉強にはとてもよい環境でした。夏は、外が暑いので、語学センターは最高の避暑地でした。英語のビデオや映画、そして教材等が数多く揃っていて、自由に利用できます。私はよく映画を見ました。映画を楽しむことだけでなく、英語の勉強にもなりました。特に口語の使い方など、場面を見ながら言葉を覚えていきました。文法に関しては語学センターの教材や雑誌をよく読みました。一気に沢山は覚えきれませんでしたでしたが、少しずつ興味のある言葉を学習しました。

個展「文化庁研修報告展」(仮)
10月28日～11月3日
広島三越画廊、入場無料

語学教材の貸し出しをしたり、外国の友人達とEメール、英文雑誌で気分転換、DVDで映画視聴をし、利用者の少ない長期休暇中にも本当によく通いました。最初はどの勉強していいかわからず、語学の専門家である先生方を訪ね、池田寛子先生を中心に学習法のアドバイスを受けました。国際学部の授業に参加させてもらったことも数知れず、この場を借りてお礼申し上げたいです。



「老紅梅」

在学中の努力は自分の専門分野(作品)+語学力という強みを与えてくれ、徐々に世界を広げてくれました。学校等の研究機関に所属していることが留学助成金の申請条件である場合も多く、そもそも学生でなければ外国での長期滞在が取得は困難です。もし外国に興味のある在学生在がこの記事を読んでくれるなら、語学センターをうまく利用して学生であるチャンスを存分に活かして世界を広げていって下さい。きっと皆さんならより短期間にもっと大きく羽ばたけるはずですよ。

Q. 今の仕事に英語はどう役立っていますか？

英語は仕事や生活のツールなので、英語ができないとアメリカでは生きていけません。学ばば学ぶほど、自分の足りない部分に気づきます。英語の勉強は積み重ねです。毎日コツコツ習得することが数年後、大きな成果につながります。私は今も昔の習慣を継続していて、よく映画などを見て英語を独学しています。特にアメリカの人たちとの日常会話で、言葉への感覚を養っています。時々、教科書と実際に使う場面とのギャップがあるので、違和感を感じると、すぐ電子辞書を取り出して調べます。

兎に角、分からない言葉をその場で消化していき、あとは温故知新で身につけるとするのが、自分なりの学習方法です。

Q. 後輩たちにメッセージを！

英語の勉強に焦らず、コツコツ積み重ねて下さい。日本の電子辞書はとても軽く、持ちやすいので、勉強に役立つツールです。お勧めします。私は日本の電子辞書を今でも毎日携帯して、愛用しています。生活の中で欠かせない大切なものとなっています。

これからもっと多くの日系企業が海外へ進出していくにつれて、国際的な人材が益々求められるようになると思います。国際舞台の上でもっと多くの市立大学の卒業生が活躍するよう、切に願っています。

陳さんは、4月28日にテューペロで発生した竜巻の被害を受け、住居の引っ越しなどを余技なくされる中、寄稿してくださいました。



現在、在住のミシシッピ州テューペロは、エルビス・プレスリー生誕の地として広く知られている

TOYOTA 車体設備の輸入・
設置工事を担当
世界の TOYOTA に学ぶ

進路変更して、イギリスへ 人形アニメ制作、アニメ映画祭で イギリスと日本の架け橋に

メレディス英子（国際学部 3 期生
2006 年 芸術学研究科 博士前期課程修了）
人形アニメーション作家・
こたつ日本アニメーション映画祭ディレクター
イギリス在住



「こたつ日本アニメーション映画祭」会場にて

Q. 語学センターの思い出は？

学生のときは、課題のレポートを書いたり、リスニングの勉強をする目的で語学センターを利用していました。それに、よく映画を見ていましたね。語学センターにある映画の種類は多いので、おすすめです。

Q. 今の自分に外国語はどう役立っていますか？

イギリスの田舎、ウェールズ地方にイギリス人で人形アニメーターの旦那と娘と、住んでいます。

私は 2010 年からこたつ日本アニメーション映画祭をウェールズで開催しています。どうして映画祭をするようになったかと言うと、たまたま映画館が改装して、新しいアイデアを求めているので、提案したんです。「日本のアニメーションの映画祭を開催しましょう」と。最初はいぶかしがられましたが、回を重ねることにファンが確実に増えてきました。こういう風に若い人にチャンスを与えるのが、イギリスのとってもいいところだと確信しています。

今年で 4 回目なのでだいぶ運営も楽になりましたが、最初は大変でした。私も英語がまだそれほど上手でなく、イギリス的で婉曲的な話し方をしなければいけないこと、何度も何度も、何度も同じ事をやってももらえるまで催促しなければいけないことも学びました。在学中にお世話になった大井健地教授に、「日本とイギリスをつなぐ架け橋になれ」と言われかなりプレッシャーを感じましたが、ひょんなことで実現できたので、先生のご指導のおかげかもしれません。

ぜひ機会があれば、こたつ映画祭に遊びにいらしてください。

Q. 後輩たちにメッセージを！

まずは、将来やりたいこと、実現したい夢を全部、紙に書き出してみよう。留学したい、世界で働きたい。なんでもいいんです。在学中の私のリストはこうでした。

イギリスで人形アニメーションの現場が見たい、映画祭がしたい、ジョージ・クルーニーに会いたい。などなど。

こんな途方もないこと書いて、どれも絶対無理じゃらって思うでしょう？すべてではありませんが、リストに書いた夢のいくつかは、

叶ったんです。

市立大学大学院、芸術研究科映像情報造形専攻修了後、私はイギリスに留学してアニメーションを学び、イギリス中の人形アニメーションスタジオに電話して親切なスタジオを見学させていただきました。短期間でしたが、ティム・パートン監督の映画「フランケンウィニー」でも働きました。現在はこたつ映画祭に専念しています。

国際学部のみなさんは、外国語をたくさん学ばれていると思います。これからの時代、英語はもちろん、日本語以外の言語も習得でき

れば、確実に自分の武器になります。ただ、言語よりもっと重要なことが世の中には存在します。それは、確固たる一家言を持つこと。そして、それをきちんと相手に伝えること。

日本人は礼儀正しくて海外で好かれますが、はっきり意見を言わないので何を考えているかわからないやむやな存在だと思われがち。そういう人は日本ではいい人と見なされますが、海外ではほっとかれたり、運が悪くと利用されてしまいます。

間違いを恐れず、自分の意見を伝えるように努力しましょう。そして自分の意見と相手の意見が違った場合には、世の中には様々な考え方があるという事実を受け入れましょう。

そのためには、前述したやりたいことリストを作ることをお勧めします。やりたいことが絞れば、自分の意見も明確になります。

あなたが書いたリストの一部が、もしかしたら将来実現できるかもしれません。できないかもしれません。でも、挑戦する前にどうせだめだろうな、とあきらめるのは時期尚早です。「夢は必ず叶う」と言えば嘘になりますが、「夢は時々叶う」は本当なんです。ま、かなり時間はかかりますけどね。

私の今のリストには、こたつ映画祭をとりあえず 10 年継続する、とあります。後は現在制作している人形アニメーション「Looking for a Star」を完成させること。

残念ながらジョージ・クルーニーにはまだ会えていませんが、いつかウェールズに映画のロケでやってくるかもしれません。正直無理があると自分でも思いつつ、まだリストからは消さないつもりです。(笑)

「こたつ日本アニメーション映画祭」
June 7th & 21th, 2014 in the UK
<http://www.kotatsufestival.com>
スタジオジブリ高畑勲氏のメッセージも



Character Design by Chie Arai

詩のお弁当 (3)

天の詩から地の小説へ 跨ぎゆく誠実 富岡多恵子のアキテ別れた

大井健地（名誉教授・芸術資料館もと館長）

富岡多恵子を尊敬している。

なのに、今度あらためて『富岡多恵子詩集』（思潮社現代詩文庫 15、1968 年）を読んでみたが、ううむ、ここで引用したいほどの作品に出会わない。歯がたたない。味がしない。そんなはずはないと思うのにわれながら不思議。

この間、評伝『室生犀星』（筑摩 82）から『詩よ歌よ、さようなら』（冬樹社 78、集英社文庫 82）を経て『富岡多恵子の発言 1～5』（岩波 95）に至り、反芻して読んで、そして断固、厚い敬意で遇すべき信頼できる文筆家だと僕は得心した。

『富岡多恵子の発言』は、時事評論集と概括するにはおいしい人間普遍の考察がきらめく精選評論エッセイ集。1 性、2 詩歌、3 女、4 芸能、5 小説、を核に論ずる全 5 冊。「性」のみならず「家」や「ことば」の課題が面白く体験的に露出され、巾広い仕事とその方向性が理解できる。

なにしろ彼女は気どらず正直だし、ムツカシイ論法はとらない。室生犀星ばかりでなく、小野十三郎、折口信夫らへの富岡の敬意は深くその根柢がいちいち納得できる。「鮭詩人」と形容されるように富岡は根元に遡及して勉強しようと努力する誠実の人だ。

富岡多恵子は現在でも「詩人・小説家」とされているが、「高名な若手詩人」として詩作していたのはじつはるか昔のこと。再び詩をつくることはもうないだろう。1971 年から詩を離れ小説に“溝跨ぎ”を取行する。

僕の愚鈍さのあかしのようにも思えるが、以下、詩と小説の違いを富岡の分析と形容によって列挙してみる。

詩は野暮じゃない、ハイカラなもの。ところが小説は野暮なもの。「野暮に徹していかないと、なにかが現れ出てこない」（書けるまで机をはなれずに自分をいぢめあげてやっと思える、と犀星はいうが同種だろう）。

詩は天に向って結局、声をあげる。小説は声をあげることなく地を向き地べたを這っていく。両者は共存共栄しうる仲の良いものではない。

詩は「ウタウ」であり主観的な発情行為であるが、小説は相手あつての「カタル（ないしノベル）」であり、生存の認識を深め客観化するべく解説しひろげる。

詩＝ウタウの本義はほめたたえることにあり、小説＝カタルことは聴き手をだますことだった。

「詩の本質は善良で健全である」。富岡多恵子はそれにアキタという。無論、詩語の常套や詩法の常識には当然アキル。過去の詩の「枠」の順守は物足りない。ウタウ自己陶醉は嫌だ。深々と新しくなければ。

エエカッコシーは嫌、エエカッコ詩め。悪や汚なさや至らなさや、地上の猥雑性、複雑さを取込んで騙り述べるを創作したい。だから小説家に。

昭和 9（1934）年、絶品短篇「あにいもうと」をばねに室生犀星は詩人から小説家へ「飛躍」する。「詩よきみとお別れする」という題の随筆も同年。小説と世態風俗に無関心で「死ぬまで詩人」だった朔太郎は「きみの小説なんて新聞の社会面（三面記事）みたいなものじゃないか」と犀星をこきおろす。その朔太郎の代表作「帰郷」（『氷島』

も同年刊である。イカンゾイカンゾ。

富岡の『室生犀星』は犀星という大存在への懇切平易な力作啓蒙書であるとともにじつは富岡多恵子自身の詩離れ、というより詩殺しを、弁解でなく追及し、自分の文筆意欲を鞭打った自己確認の書なのである。

ランボーは詩をやめた。吉本隆明は詩をやめたが小説には行かない。入沢康夫は（朔太郎のように）ずっと詩と詩論だ。富岡は小説家になって長い（平田俊子、小池昌代も同じ道筋か）。『湖の南』（岩波現代文庫 2011）という富岡小説の近作では細み感度の歴史語り不穩にはじまり、とらえがたい老練の闇がひろがる思い。



外国語担当教員からのメッセージ

国際学部のルディムナ・クリスチャン先生と岩田一成先生が昨年度末の3月31日付で退任されました。そして、新たに今年度4月より国際学部に大場静枝先生とカーソン・ルーク先生が着任されました。4名の先生方から皆さんへメッセージを書いていただきました。

退任教員メッセージ



Réussir dans la vie ou réussir sa vie ? 人生における成功とは？

国際学部名誉教授 ルディムナ, クリスチャン
LE DIMNA Christian

40年前に、私は設置されたばかりの筑波大学で大学教員の職を始めました。そして開学20周年を祝う広島市立大学でこの職を終えました。

40年の間に、世界、日本社会、また大学も大きく変わり、それらはすべて経済的要請に従うものとなってきました。法人化は大学を商業的企業へと変容させてしまいました。今や大学は競争原理にさらされて、顧客となった学生とその家族の要求を満足させなければなりません。じっさい、学生たちは、人生においての彼らの社会的成功のために、多くのお金を大学に投資しています。大学もまた、企業に従い、国からはもはや与えられない研究費を教員たちは企業に求めています。こうして、大学は、自分自身を売り、また販売促進に参与するために諸外国語を学ぶ「人材」と呼ばれる交換可能な働き手を養成する企

業とも言えるものに次第になってきています。

その結果、大学においては、良心を有して自らの意見に責任を持つ市民の形成や、理解力と共感と平和という人間的価値を持って世界に開かれた人間の形成のために知と真理を探究するという当初の任務の意味が失われたのです。これらの価値はまさに人文科学がもたらすものですが、この人文科学が大学からほとんど消えてしまいました。「良心なき学問は魂の滅亡でしかない」と、ラブレールは警告していたのですが。

私は、教員が経営や販売ではなく、真理の探究に専心する時間を再び持てるような場としての大学になることを願います。大学はその本来の役割を再認識して、各学生に、「人材」としての社会的成功のみではなく、真理と現実についての知を基礎として、また公正な行動によって、とりわけ人としての成功をもたらすようにするべきなのです。

聖心女子大学文学部准教授・国際学部前准教授 岩田一成

す。授業だけではなく研究会などでもいろいろ使わせていただきました。誰かが置き忘れていたバンドエードの箱、一度遊んでみたかった棚の上にあるスクラブル、機嫌の悪いときはワイヤレスが飛んでくれないプロジェクター、目をつぶっていても部屋のレイアウトは思い出されます。特に思い出深いのは、私が採用面接を受けたときのことです。共同研究室には、青木先生、岩井先生といった今の管理職大御所重鎮の面々に加え、3名の先生方がずらりと並んでおられました。そして、青木先生から「僕たちを外国人留学生だと思って模擬授業をやってほしい」と言われ、「外国人ちゃやん！しかも、こんな貫禄がある留学生なんか教えたことないがな～」と心の中で叫んだのがつい最近のようです。6年間、本当にあっというまでした。これからもまたお会いできることを願って、文章を締めます。

語学センターでの思い出

みなさまこんにちは。2014年3月まで広島市立大学でお世話になっていた岩田一成です。4月から東京の聖心女子大に異動しました。語学センターは大変便利でいろいろとお世話になりました。思えば語学センターでお

借りした機材は、ラミネーター、ICレコーダー、ビデオカメラ、三脚、デジカメ、ラジカセ、コンピュータ、マルチカードリーダー、卓上スピーカー（薄型）、卓上スピーカー（特大）、マイク、台車などなど尽きません。こうやって感謝の念をたくさん書くと、今の職場に不満があるかのように思われてしまうかもしれませんが、それを伝えるのが本意ではありません。あくまで、語学センターへの感謝の辞です。

語学センターで一番印象に残っている場所は、共同研究室で

新着任教員メッセージ



初めての留学の思い出

国際学部准教授 大場静枝

皆さん。こんにちは。今春、国際学部に着任した大場静枝です。専門はフランス文学とフランス・ブルターニュ地方をフィールドとする地域文化研究です。語学センターでは、フランス語を担当しています。

着任してまだ3ヶ月ですが、「留学したい」「外国に行きたい」という学生たちの声をたびたび耳にしています。本学には海外志向の学生が多いようですね。私も大学時代、フランス文学を専攻していたこともあって、フランスに行きたいと思っていました。私のその願いが叶ったのは、大学3年生の夏でした。南仏のリゾート地ニースにある国立大学の語学研修に参加したのです。

ニース大学のサマースクールには、世界各国から、年齢や職業の異なる人々が集まっていました。私は、当初、フランス語が上手に話せないことで、居心地の悪い思いをしていましたが、ある時、クラスメイトの話す流暢なフランス語を聞いていて、必ずしも正確なフランス語を話しているわけではないということに気がついたのです。でも、誰も間違いだらけのフランス語を気にしていないし、恥ずかしがりもしません。そして驚いたことに彼らのフランス語はどんどんと上達していったのです。

その時、きれいなフランス語を話せないからといって、物怖じして発言しないのは損なのだ、正しくなくても、文法や発音に誤りがあっても、積極的に言いたいこと伝えようとする方が語学は上達するのだ、ということを実感しました。それからは

毎夜ベッドの中で、その日にあった出来事を思い返し、もう一度あの場面に出くわしたらこう言おう、あの話題になったらこんなエピソードも紹介しよう、あんなことを言われたら黙っていないでこう切り返してやろうなどと、シミュレーションをしました。

不思議なもので、頭の中で想定した場面や話題には、きまっでどこかで遭遇しました。そんな時はフランス語が自然と口について出てきて、とても嬉しかったことを覚えています。日を追うごとに人と会話をするのが楽しくなり、気がついたらずい



Enjoying the Journey

Some quiet mornings, when I awake, I am surprised to sleepily realize that I am lying on a futon in a tatami room. How did this happen? I usually smile silently, as although my life path so far is not something I ever imagined, I am very much enjoying the journey.

I was born and grew up beside the sea in a suburb of Dublin, the capital city of Ireland. Dublin is similar in size to Hiroshima, and like Hiroshima, while it is cosmopolitan, it also possesses a friendly, almost local feel. I attended university right in the vibrant centre of the city, and this experience took me out of the small world of my childhood, and exposed me to people from all walks of life – rich and poor, happy and angry, those from other parts of the country and other countries. I started to become fascinated with places, faces, people and all the different ways of communicating, enjoying and thinking. I started asking questions.

My first experience working abroad was my first university summer, when I travelled and worked across some Spanish islands. Due to the location of Spain, I also met a lot of African workers and travellers, which opened up another world to me. I spent my next university summer backpacking around Africa, surviving using my not very excellent French. But my eyes and mind were opened, alive to how much I could learn every day (in later years, I worked on collaborative education programmes

ぶんとフランス語が上達していました。この経験が私の自信になり、その後、7年にわたるフランス滞在へとつながっていきました。

今思えば、この短期留学で私が得た最大の収穫は、文化を異にする人々と話す楽しさを知ったことでした。皆さんも大学4年間のあいだに、ぜひ一度日本の外に出て、育った環境や価値観の異なる人たちと交わり、会話をする楽しさを経験してください。きっと、皆さんの世界も変わると思いますよ。

国際学部准教授 カーソン, ルーク
CARSON Luke

between Ireland and Africa). In my final year of university, I had a 'happy accident', when a friend gave me the novel Dance Dance Dance by Haruki Murakami. I decided very quickly one day. I was going to Japan.

Since that day, I have lived in Japan, left and worked elsewhere, and returned again. Now, I am delighted to be making my life here in Hiroshima and at HCU.

At HCU, I am teaching cross-cultural courses and English communication courses. I am also researching how learning happens, so that we can understand it more clearly. I hope that I can help students see how much potential learning can unlock, and how much potential every individual student has, particularly if they decide to take control and be active in their learning lives. Learning success is not controlled by teachers (though good teachers are a great help!), but largely by learners themselves.

In my life, I have sometimes been told 'You can't do that'. Well, while I have received much good advice in my life, I did not listen to this piece of advice. Why? Because it is nonsense. My experience has shown me, if you want to do something, small or big, and have the passion to persevere through both ups and downs, you possibly can. You can definitely try. I hope you enjoy your journey.

2014年度前期 知のトライアスロン映画上映会開催 世界のアニメーションII & ドラマ特集

6月23日(月)～6月27日(金)に、語学センターにて、いちだい知のトライアスロン映画上映会を開催しました。国際学部のヴェール・ウルリケ先生にご協力頂き、「多文化共生入門」との連携企画で行いました。飯島典子先生、大場静枝先生、国際学研究科のハンサンジンさんに映画の解説をして頂き、昨年に引き続き、大盛況な上映会となりました。後期(12月)にも映画上映会を予定しておりますので、ぜひご参加ください。

テーマ：世界のアニメーションII & ドラマ特集

映画解説：6月24日(火) 14:40～16:10 大場静枝先生「パリ猫ディノの夜」(フランス)

6月25日(水) 13:00～14:30 国際学研究科のハンサンジンさん「東京タクシー」(韓国・日本)

6月27日(金) 13:00～16:10 飯島典子先生「カンフーパンダ」(アメリカ)

その他上映映画：「タンタンの冒険—ななつの水晶球と太陽の神殿」(フランス・ベルギー他)、「カールじいさんの空飛ぶ家」(アメリカ)、「ムーラン」(アメリカ) *番外編：「愛より強く」(ドイツ)



404教室での飯島先生による解説の様子



巡回写真展「広島でアフリカの〈老いの力〉をみる」 国際学部 准教授 田川 玄



語学センターホールでの写真展の様子

「広島でアフリカの〈老いの力〉をみる」と題して、広島市留学生会館交流ラウンジ(3月18日(火) - 30日(日))、本学語学センターホール(3月31日(月) - 4月10日(木))、広島市まちづくり市民交流プラザ(4月17日(木) - 20日(日))において巡回写真展を開催しました。この巡回写真展は、日本アフリカ学会中国四国支部、日本ナイル・エチオピア学会、NPO 法人アフリック・アフリカ、JSPS 科学研究費基盤(B) プロジェクト「グローバル化するアフリカにおける〈老いの力〉の生成と変容」が共同して開催したイベントです。また、第23回日本ナイル・エチオピア学会学術大会公開シンポジウム「アフリカから〈老いの力〉を学ぶー老年文化の多様性」(開催日:4月19日(土)、会場:広島市まちづくり市民交流プラザ)の関連イベントでもあります。

展示写真は、アフリカでフィールドワークをしている若い研究者が調査地の老人たちを撮影したものです。多くの研究者にとって現地に出会う老人たちは、慣習や過去の出来事についての教えを請う相手です。あるいは、おしゃべり相手になってくれる暇つぶしの相手でもあります。

わたしが、留学生会館のラウンジで展示作業を行っていたところ、ふらりとひとりの男性が現れました。写真展ではじめてのお客さんでした。関東からの旅行者で、たまたまここにやってきたそうです。彼はじっくりと写真を見ていたのですが、やがて、ある写真を指してわたしに言ったのです。

「この写真には老人だけでなく、レンズのこちら側の撮影者も写っているんですね。」

写真には客体としての被写体が写し出されているだけではなく、撮影者と被写体との関係が埋め込まれているということ、その方は述べたのです。これらの展示写真は調査資料ではなく、現地の人びととの生活のなかで何気に撮ったものがほとんどかと思われます。そこにはプロの写真家による作品のような洗練された撮影技法や作家性はありません。その代わりに、そのときのその場における撮影者である「若者」と老人たちの付き合いが、何の飾りもなくそのままに再現されています。それは、アフリカの老人たちと撮影者の両者にとって、実に平凡であるが一度だけの一枚しかない写真となっているのです。



アフリカの老人たちの写真に見入る学生

・・・退任スタッフからのメッセージ・・・



今年の3月まで語学センターのスタッフとして勤務していた伊達美和子です。実は、国際学部の第7期生でもあり、学生時代を合わせると市大には約13年いたことになります。その間、授業も施設も益々魅力的なものになっていることを肌で感じてきました。特に、語学センターは語学を極めたい人には至れり尽くせりの施設です。こうした恵まれた環境を大いに活用し、皆さんには将来への明るい扉を自分の力で開いていって欲しいと思います。

・・・新任スタッフからのメッセージ・・・



今年の4月から、伊達美和子さんの後任として着任した、加藤美奈です。昨年7月から3月まではCALL英語集中とeラーニング英語の窓口を担当していました。みなさんにはぜひ有意義に語学センターを活用して頂きたいと思いますので、何かありましたら、語学センターのスタッフに声を掛けてくださいね。



4月から語学センターでお世話になることになりました、福原愛彩と申します。広島出身のカープ女子です。不安なことや相談、要望などがあれば、気軽に語学センターへきてくださいね。精一杯、みなさんのサポートが出来ればと思っています。よろしくお祈りします!!

平成27年度前期海外学術交流協定校 留学座談会開催

2014年6月11日(水)に、平成27年度前期海外学術交流協定校留学座談会が語学センターで開催されました。国際学部の西田先生のもと、留学経験のある学生が主体となり、学生達の質問に答えたり、意見交換がなされました。60名程の学生が参加し、大盛況のうちに終わりました。



先輩の声に真剣に耳を傾ける学生達

◆ 視察・オープンキャンパス等報告 ◆

- 6月5日 進路指導教員対象大学説明会 (46名)
- 6月12日 山口県立光高等学校 (68名)
- 6月13日 広島県立三次高等学校 (30名)
- 6月16日 安芸太田町立加計中学校 (24名)
- 6月22日 プレ・オープンキャンパス (65名)
- 7月2日 広島県立賀茂北高等学校PTA (6名)
- 7月23日 広島県立広島井口高等学校 (42名)

発行日 2014年7月30日
 発行 広島市立大学語学センター
 〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1
 編集 堀本真由美、加藤美奈 (内線:6410)
 Phone (082)830-1509 Fax (082)830-1794
 E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
 ホームページ
<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>